

読者を待つ言葉たち

——『わたしもじだいのいちぶです』刊行に寄せて——

康 潤伊

このたび、康潤伊・鈴木宏子・丹野清人編『わたしもじだいのいちぶです—川崎桜本・ハルモニたちがつづった生活史—』（日本評論社）を刊行する運びとなった。本稿では、出版の背景を述べるとともに、本の内容について若干のガイドを行いたい。

川崎と聞けば、何がイメージされるだろうか。南部と北部ではまったく異なるにちがいない。北部はたまプラーザや鷺沼などに代表される「新都市」であり、南部は京浜工業地帯や「ドヤ街」などがイメージされるだろう。南部は近年、そのアンダーグラウンド性からか、「工場夜景」観光やHIPHOPの新たな聖地として注目されている。実際、川崎南部の住宅街を少し歩けば、空き地や公園で即興ラップをしている中高生の姿を目にすることができる。

その南部に、桜本という街がある。全国でも有数の在日外国人集住地域であるとともに、多文化共生を推し進めてきた地域として知られている。推進のリーダーとなったのは、社会福祉法人青丘社が運営するふれあい館である。このふれあい館は一九八八年に設立され、当初から在日朝鮮人⁽¹⁾の非識字者のための識字学級が開かれた。のちに識字学級の事業的な位置づけは変化していくが、現在も引き続き行われており、「ウリマダン」（朝鮮語で「私たちの場」という意味）と呼ばれている。

この識字学級でつづられた作文は、これまで二冊の私家版にまとめられている。ふれあい館高齢者識字学級・ウリハッキョ編『おもいはふかく』（2011年6月）、かわさきの在日高齢者と結ぶ2000人ネットワーク編『一字一字におもいをこめて』（2017年7月）である。だが今あらためて在日朝鮮人女性たちの言葉を社会に向けて開きたい、そのためには出版流通に乗せねばならないという思いから本書の出版企画は動き出した。これまでの二冊は、個人史を記録する



ことと彼女たちをエンパワーすることに重点を置いていたが、より広範な読者に届けようと思えば編集や解説の方向性を変えねばならない。まず何よりも彼女たちの表現に焦点化しつつ、そこから読み解けることを読者にも開こうというのがおおまかな方針であった。編集メンバーも、長年識字学級でハルモニたちの学びをサポートしてきた人、ふれあい館の職員、研究者と多彩な顔ぶれで構成した。

次の問題は、出版資金の獲得であった。ひとつ出版助成にも応募してみたが、あえなく落選してしまった。そこでクラウドファンディングに挑戦することにしたが、ヘイトスピーカーのコメントがあふれることへの危惧もあり、厳しい活動になるだろうと稿者は予測していた。だがその予測は裏切られ、2ヶ月で支援者は延べ202人、総額で180万円の資金が集まり、コメント欄には温かい言葉が満ちた。稿者も驚きを隠せなかったが、本書が今社会に出るべきであることを強く確信するに至った。そもそも出版する目的が彼女たちの言葉を社会に開くことにあった点をふまえると、出版資金がクラウドファンディングによって集められたことには大きな意義があったといえる。つまり、何らかの団体から史料のあるいは研究的価値が認められトップダウン式に支給されるのではなく、個々人が「読みたい」と思い投じた資金で出版に至ったことで、出版する目的はなかば達成されたと言ってよいのではなかろうか。もちろん、だからといって編集作業をおろそかにしたわけではないことはことわっておきたい。

出版資金獲得の経緯にしろ、編集メンバーにしろ、本書はアカデミックな領域からは少しずれている。アカデミズムと草の根運動が共同で出版した事例は少ないだろうが、稿者にとっては初めての経験であると同時に、学術的意義をある程度担保しつつアカデミズム外の人々に届く内容にどこまでできるかといった挑戦でもあった。その結果は、今後の読者の反応を待つばかりである。

さて、彼女たちがなぜ高齢になるまで非識字状態に置かれていたのかといえば、やや図式的すぎる説明になるが、民族・階級・ジェンダーが複合的に作用したためである。民族差別によって朝鮮人は社会的に劣位に置かれる。こうした劣位は、子ども全員を学校に入れる余裕がなかったり、家事育児を担えないほど両親が働きづめになったりするような貧困を招き、女性たちを学校から遠ざけた。当然ここには、「女が勉強すると狐になる」「女が文字を覚えると、嫁に行ったあとに婚家の悪口を手紙に書いて実家によこす」「女は父に仕え、夫に仕え、息子に仕える」といった儒教に基づいた女性差別も作用している。

識字能力がないという状態がいかに苦難に満ちあふれているか、稿者はあまり想像ができない。買い物に行っても塩と砂糖が区別できない、名前が書けないので銀行でお金をおろせないといった衝撃的な具体例を聞いて、ようやくおぼろげなイメ

ージがつかめる程度である。

さぞや嘆きと苦しみにあふれた作文なのだろうと身構えてしまうかもしれないが、意外にもと言おうか、彼女たちの笑顔はまぶしく輝いており、美しい思い出や喜びにあふれた作文もある。むしろそれで慰められたり癒されたりしては、みずからのマジョリティ性に目をつぶり、彼女たちを搾取することになってしまうため注意を要するのだが、そうした「慎重」ぶった顔をせずとも、彼女たちの言葉の魅力は伝わると思う。その魅力については、ここではこれ以上書かない。本書には、彼女たちの写真もふんだんにおさめた。名伏しがたいがどこか惹かれる——そうした桜本の、そしてハルモニたちの印象を、多くの読者に感じていただければ幸いである。

クラウドファンディングが達成されたあとの識字学級で、編集メンバーのひとりである崔江以子氏が、本が出版されることをハルモニたちに報告してくれた。自分たちの作文が200人以上の人々に待たれているなど思いもよらない彼女たちは、「夢みたい」とつぶやいたようだ。2018年11月9日、ふれあい館で行われた講座でマイクを握ったあるハルモニは、誇らしげに二度「今度ね、日記が本になるんだよ」と語った。⁽⁴⁾ 厳密に言えば「作文」が最も近い表現だと思うのだが、このハルモニにとっては「日記」なのだろう。これまでに自分が書いてきたものへの愛着が感じられる表現である。本書は、彼女たちが書き続け学び続けてきた結晶そのもののものだ。読者へ開くことと個人をエンパワーすることは、それほどかけ離れてはいないのだと気づかされた。

日記は極私的なものではなく、したがって読者がまったくくない日記もまたありえない。連綿と書きつづられたハルモニたちの「日記」は、今まさに読者を待っている。

注

- (1) 本稿ではこの語を「植民地支配期の朝鮮にルーツを持つ者」の意で用いている。
- (2) これらの本の中では、彼女たちを「ハルモニ」（朝鮮語で「おばあさん」の意）と呼んでいる。本書のサブタイトルにも「ハルモニ」を用いている。
- (3) 現在でもクラウドファンディングのページは残っており、支援者たちのコメントおよび著名人らによる応援メッセージは閲覧可能である。ぜひご一読されたい。「川崎桜本のハルモニがおもいをこめてつづった作文を、一冊の本にしたい。『わたしもじだいのいちぶです』出版プロジェクト」『MOTION GALLERY』（<https://motion-gallery.net/projects/sakuramoto>）（最終閲覧2018年12月5日）
- (4) 本書所収の石橋学氏の「特別寄稿」に依る。

（かん・ゆに／早稲田大学）